平成２５年度一泊旅行

泉南と河内を訪ねて

２０１３年　１０月１９日～２０日

備陽史探訪の会

はじめに

　平成２５年度の一泊旅行は岸和田市、千早赤阪村、河南町、富田林市を訪ねます。史跡が豊富なこの地方を巡る旅はいろんなコースが立案されますが、この度は熟慮のうえ下記のコースとしました。
見学地の主な見どころは・・
〇岸和田市にのこる城下町のたたずまいを歩く
〇千早赤阪村では楠木正成にまつわる史跡を見学する
〇河南町では西行の人となりに、また金山古墳と近つ飛鳥博物館で日本の古代文化に触れる
〇富田林市では真宗門徒の自治集落であった旧寺内町の町並みを見学する。

※一泊旅行では歴史を学びつつ、二日間の旅を通じて親睦の輪が一層深まることも目的としています。皆様のご協力で楽しい旅となりますよう、宜しくお願いいたします。

◎この度の一泊旅行に際しましては、事前に各方面に様々な問い合わせをして貴重な情報をいただきました。篤く御礼申し上げます。
【御世話になりました機関】
岸和田市役所、岸和田市観光振興協会、千早赤阪村役場、河南町役場、近つ飛鳥博物館
富田林市役所、富田林観光協会ほか

平成２５年度旅行委員　藤井保夫・種本実

Ｈ２５年一泊旅行　一日目日程

福山駅北口へ集合・・・・・・・・・０７：１５
福山駅北口出発・・・・・・・・・・０７：３０

岸和田市営駐車場着・・・・・・・１１:３０

昼食「五風荘がんこ」・・・・・・１１：４０～１２：４０　※庭園を観賞

岸和田城天守閣へ入館・・・・・・１３：００～１４：００　※石垣を観賞する

「だんじり会館」入館・・・・・・１４：１０～１５：００　※銘菓など売店もあり

城下町筋を歩く・・・・・・・・・・１５：１０～１６：１０
一里塚・防潮石垣・吉田松陰逗留地・北大手門跡・堺口門跡・旧４３銀行
※洋裁コシノ店は希望者のみ見学する

市営駐車場出発・・・・・・・・・・１６：２０　※トイレを済ませて乗車

久米田寺着　見学・・・・・・・・・１６：４０～１７：１０

久米田寺出発・・・・・・・・・・・１７：１５　※トイレを済ませて乗車

かんぽの宿「富田林」着・・・・・１８：１０

二日目日程

かんぽの宿「富田林」発・・・・・・０８：００

上赤坂城跡登城・・・・・・・・・・０８:３０～０９：４０　※登り口まではバス

千早赤阪村
郷土資料館入館・・・・・・・・・・０９：５０～１０：２０　※トイレを済せる

金山古墳見学・・・・・・・・・・・１０:４０～１１：１０　※駐車場有

弘川寺拝観・・・・・・・・・・・・１１：２０～１２：００

風土記の丘にて昼食・・・・・・・・・１２：１５～１３：００

近つ飛鳥博物館見学・・・・・・・・・１３：１０～１４：００

〃　　出発・・・・・・・・・１４：１０　　※トイレを済ませて乗車

富田林駅西口着・・・・・・・・・・・１４：３０　　※バスは「スバルホール」へ

富田林寺内町を歩く・・・・・・・・・１４：４０～１５：４０　　※団体行動で歩く

富田林駅西口出発・・・・・・・・・・１５：５０　　※トイレを済ませて乗車

福山駅北口着・・・・・・・・・・・・２０：３０

★天候、道路事情などで変更する場合はご了承ください

奈良県

○岸和田市

人口約 20 万人の特例市。　「岸和田だんじり祭」で有名。大阪湾に臨む市の中心部は寛永時代（17 世紀初め）以降、岸和田藩主・岡部氏の城下町として栄え、明治時代中期以後は泉州綿織物を主とする紡織工業都市として発展した。

■城下町岸和田

年　号	西　暦	出　来　事
建武　元	１３３４	楠木正成の甥・和田（にぎた）新兵衛高家がこの地に岸和田古城を築く。現在の城から約５００ｍ東南に古城跡の石碑がある。
永徳　２	１３８２	山名氏清が楠木氏に代わって和泉守護となり、信濃秦義を岸和田城に配置する。この時に古城から現在地に移転したとの説がある。
応永１５	１４０８	和泉半国守護・細川頼長が岸和田城に入る
永禄　元	１５５８	三好長慶の一族が岸和田城に籠城して根来、畠山勢と戦う
永禄　５	１５６２	久米田合戦で三好義賢（三好長慶の弟）が敗死
天正１１	１５８３	羽柴秀吉が中村一氏を岸和田城に配する
天正１２	１５８４	小牧・長久手合戦の間に雑賀、根来衆が蜂起し岸和田合戦が行われる
天正１３	１５８５	秀吉が雑賀、根来攻撃に岸和田城へ入る。根来攻略の後、小出秀政を岸和田城主とする
慶長　２	１５９７	５層の天守閣が竣工する
慶長　９	１６０４	小出吉政が襲封
元和　５	１６１９	小出吉英が出石へ転封となり、代わって篠山から松平康重が入る
元和　９	１６２３	伏見城が解体され、櫓、門などが岸和田城へ移される
寛永１７	１６４０	松平康映が播磨山崎へ転封となり、代わって高槻から岡部宣勝が入る
文政１０	１８２７	落雷により天守閣を焼失する
明治　元	１８６８	岡部氏１３代で明治維新を迎える
昭和２８	１９５３	重森三玲により八陣の庭が作庭される
昭和２９	１９５４	天守閣が復興される
昭和４４	１５６９	二重櫓・多聞櫓が再建される
平成　３ ～　４	１９９１ ～１９９２	天守閣の改修工事が行われた　天守閣屋根葺き替、外壁塗り替、内部改修　郷土資料館および城壁塀外壁塗り替　櫓門１階化粧木部張替え工事

〈多聞櫓〉

〈八陣の庭〉

岸和田城

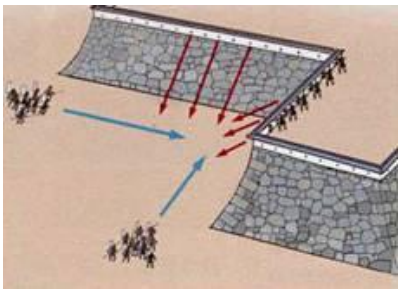
大阪府史跡。建武元（1334）年前後に、和田高家（にぎた たかいえ･楠木正季の三男､楠木正成の甥）が現在の岸和田城跡から約 500m 東に岸和田古城を築城。「岸の城」とも言われた。その後、和泉国守護・山名氏清により岸和田城主となった信濃泰義が現在地に移築した。細川、三好、松浦氏などが城主となった。

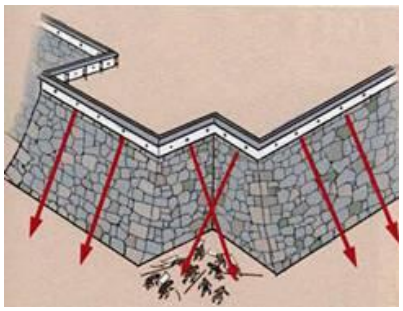
★『楠木一族の和田高家が岸和田に城を築いた』、という説は江戸時代前期に出された石橋直之「泉州志」以後に現れるのみで、南北朝期にそのような史実があったことを示す信頼できる根拠がないことから、岸和田市では伝承として扱っている。　平成１１年に天守閣の石垣が崩れ、中から一石五輪塔が１００体余り出てきた。塔に刻まれた年号が永正、・天文・永禄が多いことから石垣が築かれたのは永禄年間（１５６０年頃）と推定できる。

★★天守閣の石垣の見どころ・・

※石垣の下にある「犬走り」と呼ばれる部分は、脆い泉州砂岩で造られた石垣が崩れるのを防ぐためと言われている。石垣の周囲には「横矢」が見られる

※横矢（横矢掛り）とは、寄せての敵に対して側面から弓矢や鉄砲による反撃を指す。人間の目は、前面と側面の敵の動きを同時に認識し対処するのは困難であるから、側面からの反撃は攻め寄せる敵に対処する有効な方法といえる。城郭では、寄せての側面に攻撃ができそうな部分に石垣・土塁・櫓・塀などを張り出させておく。これを横矢、横矢掛り（よこやがかり）という。





※二の丸には伏見城から移築された伏見櫓の跡がある
移築された伏見櫓・・・岸和田城、福山城、膳所城、尼崎城
現存するのは福山城の伏見櫓（重要文化財）のみ

※当初は図書館として建てられたが、現在天守内部は資料館となっている。岡部家の遺品の他、武具や郷土ゆかりの民具、古文書、美術品などの展示を行っている。

※平成２５年特別展「新島八重と岸和田」を開催中！（９月４日～１２月１日）

以下は岸和田市のホームページから引用

《明治 11(1878)年 7 月新島襄がキリスト教伝道のため来岸し、同年末には新島八重が女性への布教のために来岸しました。今話題の新島八重と岸和田との関わりやその背景、その後の歴史への影響等について関連資料によって紹介します。平成 25 年 9 月 4 日（水曜日）から岸和田市内に伝わる新島八重の手紙などの資料を岸和田城天守閣 2 階展示室で展示し、新島八重と岸和田との関わりについて紹介します。 今年 NHK 大河ドラマ「八重の桜」の主人公である新島八重は、女性への伝道活動のため少なくとも三回、岸和田を訪れています。それは明治 11（1878）年に新島襄がキリスト教伝道に岸和田を訪れたことに起因していますが、このことは市民の間でもまだ十分に知られていません。 旧岸和田藩士山岡家には、明治期の当主尹方（ただかた）が新島らの伝道活動に協力したことから、新島襄・八重夫妻の書簡などが伝わっています。また、山岡家はその後もキリスト教信仰を思想的背景として、山岡春が女性運動に活躍し、岸和田の近代史に足跡を残しました。 本展では、山岡家に伝わった資料を中心に、新島八重と岸和田との関わりについて紹介します。》

八陣の庭

昭和 28 年、昭和の作庭家の第一人者である重森三玲により、中国の三国時代に活躍した諸葛孔明の八陣法をイメージして作られた。庭の着工時は天守の復興の前で、復興後の天守から俯瞰することを予想して作庭されたといわれる。大将を中心に天・地・雲・風・龍・虎・鳥・蛇の各陣を配したもので、和歌山県沖の島産の緑泥片岩を用いた石組みを京都白川産の白砂で囲み、これに砂紋を描いて海中の蓬莱を表現したもの。各段は約３０センチの高さで三段に作庭されている。

＊重森三玲・・・岡山県吉備中央町の出身。昭和４０年に鞆町の安国寺の庭園を復元した。

だんじり会館

300 年の伝統を誇る「岸和田だんじり祭り」の歴史や迫力を目の当たりにできる施設。27 面マルチスクリーンによる映像で祭の熱気と迫力をリアルに再現。実物のだんじりの屋根に乗っての疑似体験もできる。　だんじりの飾りや祭りの組織など詳細に展示している。

【三の丸神社】

三の丸神社は、南北朝期の延元元（１３３６）年に、岸和田城の鎮守として建てられたのが、創始とされる。その後、寛永１７（１６４０）年に岡部宣勝が入城し、三の丸に移したので三の丸神社と呼ばれることになった。　元禄１６（１７０３）年、岸和田藩３代藩主・岡部長泰が、京都・伏見稲荷大社から稲荷大神を勧請して稲荷大社祭を行い、広く領民にも参拝を許した。　その際に領民達は、長持に車をつけたものに、太鼓を乗せて打ち鳴らし、神楽を舞いながら町中を練り歩き、さらには城内に練り込み、藩主の前でいろいろな『にわか芸』を披露したという。この時行われた稲荷祭が、現在の岸和田のだんじり祭の起源だといわれ、三の丸神社が『だんじり祭発祥の宮』と呼ばれる由縁であるという。ただし、年号など諸説がある。
＊画像は三の丸神社の掲示より引用

※今川義元の兜・・・岸和田城主・岡部家の先祖は今川家の家臣であった。桶狭間の合戦の際に、鳴海城の城主であった岡部元信は徹底抗戦を続けたが、主君の今川義元の首と引き換えに城を引き渡した。昭和１０年に三の丸神社から出た兜は今川義元の兜と鑑定されて、宮司の佐藤家で保管されている。

■だんじり
※「だんじり」とは・・・語源には「祭に出し台を引擦る」の意で略して「だし」山車。「台を引擦る（だいづり）」が「だんじり」になまる。また「神を祀る台」即ち「祭壇」は、段々を登ってゆき高い所の「奥」、即ち後の方が「尻」と呼び、略して壇尻－段尻－台尻。関東では「屋台」「山車」、大阪と関西は「だんじり」「地車」、北九州では「山笠」、京都は「鉾」「山」等と呼ばれている。

■紀州街道本町　＊左記絵図は「岸和田城いまむかし（岸和田市観光振興協会発行）」より引用
徳川幕府は成立後、江戸中心の五街道を幹線とする交通体系を整備した。紀州街道は、こうした五街道に接続する脇街道のひとつであり、紀州藩と岸和田藩の参勤交代路として、天下茶屋・住吉神社から大和川を渡り、堺・岸和田・貝塚などの大阪湾岸の町村を通り、和歌山に至る街道である。街道の名称も大阪市の中部

では住吉街道・泉南市内では熊野街道・小栗街道・若山街道と呼ばれ、また信達（しんだち）街道とも言われ、五つの名称をもっている。　　紀州藩が伊勢路に替えて。紀州街道を使い参勤交代したのは、６代藩主・徳川宗直が藩主に就いた正徳６（１７１６）年以降である。[元禄１４年からの説もある]　前藩主の８代将軍・吉宗を出した家としての格式を紀州街道の道中に示すためといわれる。　街道沿いの本町には、街道側は中二階、城側は民家から城が見えないように一階建てになっているなど、城下町の風情を残す町並がある。　街道は、堀の両端でＳ字状に折れ曲がっていて、各地の城下町にも見られる防御のための遠見遮断である。

① 一里塚弁財

②吉田松陰逗留地

③防潮石垣

④こなから坂

⑤旧４３銀行

⑥欄干橋

【①一里塚弁財天】

一里塚とは、江戸日本橋を中心として全国の主だった街路沿いに、一里（約 3.9km）ごとに設けられた路程標である。この弁財天は萬治・寛文（1658～73）の頃から祀られるようになった。

【②吉田松陰逗留地】

嘉永 6 年（1853）2 月、吉田松陰は岸和田藩校講習館の館長だった相馬九方をたずね、塩屋平衛門宅（現久住家）に 10 日間滞在。藩儒でもあった相馬九方ほか藩士と、日本の将来について夜を徹して語り明かしたと伝えられている。

【③防潮石垣】
かつての海岸線は、この二の丸石垣下まで汐が入り込んでいた。 後の松平康重の時代(1619～1640)に浜側に防潮石垣が築かれ、城下町が整備されていった。高さ約 150 ㎝のこの石垣は元全長約 800m あった。

【④こなから坂】
和歌山側の入口には「伝馬口門（南町門)」が、「外曲輪（堺町)」側には「内町門」が設けられていた。二つの枡形は「Ｓ字」と呼ばれ、「やりまわし」が行なわれる。「北大手門」から「三ノ丸」に続く坂が「こなから坂」である。こなからは小半と書き、半分の半分で四分の一の 22.5 度の傾斜がある。
〈画像は岸和田市観光振興協会のホームページ「岸ぶら」から引用〉

【⑤成協信用組合岸和田支店（旧四十三銀行)】

大正 8（1919）年に建てられたこの建物は、赤いレンガと花こう岩のツートンカラーのきれいな建物である。広い内部には柱が一本もないつり天井構造になっている。当初は、和歌山に本店のある四十三銀行岸和田支店だった。

【⑥欄干橋】
この橋は紀州街道の古城川に架かる橋で、欄干橋と呼ばれた時期は不明だが、元禄享保頃の紀行文に「欄干橋」また旧城内、堺口御門の手前の魚屋町にあるので、文化文政時代の文書には「魚屋町橋」と書かれていた。この橋は当地方の道路元標とされていて、他町村から欄干橋までは何里何町との表示がされていた。市役所別館北角に明治時代の道路元標がある。この付近はかつて城下町の中心街で、戦前までは商家が並び芝居小屋や映画館なども多くあり、市内屈指の繁華街であった。

【紀州街道の某医院の看板には
薬種商の看板 官許　返魂丹 とある】 反魂丹（はんごんたん）とは、丸薬の一種のことである。家庭用配置用医薬品として流通し、胃痛・腹痛などに効能がある

■洋裁コシノ店
ＮＨＫの連続テレビ小説「カーネーション」の、ヒロイン小原糸子のモデルとなった小篠綾子と、後に世界的なデザイナーとして活躍する娘 3 人の生家である。二階に小篠家をしのぶ写真や遺品など展示が

してある。別途３００円の観覧料金を要す。

※連続テレビ小説「カーネーション」・・・2011 年度ＮＨＫの下半期連続テレビ小説として放映された。主演は尾野真千子（幼少期：二宮星 / 晩年：夏木マリ）。夏木マリは小篠綾子と交流があった縁で、小篠綾子が自身のブランドを立ち上げた晩年を演じた。

■久米田寺と久米田池

龍臥山（りゅうがさん）久米田寺は、宗派は高野山真言宗で本尊は「釈迦如来像」である。久米田池は神亀２（７２５）年から天平１０（７３８）年の１４年の歳月をかけて完成した。1 周約 2.６km。久米田池北西に位置する八木郷一帯は、水量の少ない天の川に頼っており、干ばつに悩む農民を見て、行基と橘諸兄が農民を集めて当時の久米田池を築造した。　池端に建つ久米田寺は、行基が天平６年に開創した名刹で「隆池院」が始まりである。　平安時代になると「興福寺」の末寺となり学問の寺として発展したが荒廃した。鎌倉時代になって復興するも戦国時代に再び、三好氏と畠山氏の「久米田の戦い」などの戦乱に巻き込まれ焼失した。荒廃していた「久米田寺」は江戸時代に入り再建が着手されて、宝暦～明和年間に再建されたものが現在の寺観となっている。金堂手前には松平定信筆の扁額「隆池院」が掲げられている。1338 年(延元 3 // 暦応 1＝建武５)に、足利直義が全国に先駆けて利生塔(安国寺に建てられた塔)を建てた寺である。

久米田寺は昭和１４年に、また、久米田池は昭和１６年に大阪府の「史跡・名勝」に指定された。この地区では秋祭りとして１０月第２土、日曜日にだんじり祭を行う。久米田池を掘った行基に感謝するために、毎年２日目に行われる「行基参り」には、同じく水を引いていた１３町が参加し、久米田寺に参拝する。「行基参り」とは名の通り、行基に感謝するために久米田寺にだんじりが参ることで、祭礼２日目の朝に１３台のだんじりが久米田寺開山堂（行基堂）前に集まる。

※「久米田寺五輪塔三基」・・・中央が「聖武天皇」、左が「光明皇后」、右が「亀山天皇」の供養塔と伝えられている。鎌倉時代の作で 1305 年、「亀山天皇」が崩御されて供養として五輪塔が建てられた際に、追善供養として「聖武天皇」と「光明皇后」の五輪塔も建てられたと伝わる。

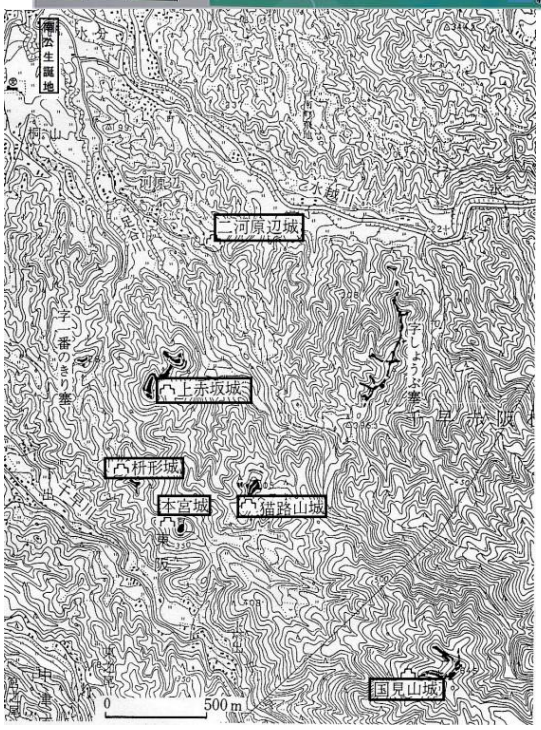
■楠木正成の出生地

楠木正成は、永仁２年（1294）現在の大阪府南河内郡千早赤阪村水分に生まれた。一族は、『悪党』と呼ばれる土豪で河内を中心に付近一帯を支配したと思われる。「太平記」によれば、「元弘の乱」で後醍醐天皇の

倒幕計画が幕府側に洩れて失敗し、天皇は笠置山に逃れた。このとき後醍醐天皇は、「童子に木の南の下につくられた玉座に案内された」夢を見て、「木に南、すなわち楠」の意味だと考え、楠木正成を呼び出したという。楠公邸址には「楠公生誕地」の碑が建っている。この碑は大久保利通の勧めに従い住民の協力を得て、楠公討死５５０年に当たっていた明治１１年に建立。大正６年５月には、皇太子（後の昭和天皇）が訪問され、クスノキを記念に植樹されている。この石碑の場所から南側の川の対岸が楠木邸跡とされ、川の手前には産湯の井戸の跡が残っている。

※上赤坂城の出城跡にある奉建塔（楠公六百年記念塔）・・・没後 600 年を記念して、昭和 15 年(1940 年)に全国の児童学生や教職員等の募金１０余万円により建てられた記念塔。正成討死の年齢 43 歳に因み、高さはおよそ 43 尺（約 13m)。塔には家紋の菊水紋、旗印の文字は「非理法権天」《非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は権に勝たず、権は天に勝たぬという意》天道に従って行動すべきであるという意味。(但し、旗印は史実ではなく伝承)。

上赤坂城



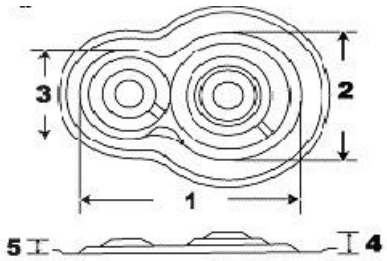
上赤坂城は、楠木城とも呼ばれており、遺構が良好な山城である。　西側の主郭（本丸)、東側の第 2 郭（2 の丸）から形成されており、主郭の周囲や、第 2 郭から北西方向に多くの曲輪（平坦地）を連ねている。　また、「そろばん橋」の地には堀切が 3 本あるので、ギザギザの堀に見えたことから橋の呼称となった。　周辺の金剛山の尾根上には下赤坂城とともに猫路山城・国見山城・桝形城等の出城が築かれており、４７城あったとされる赤坂城塞群を形成していた。　楠木正成は、元弘元（１３３１）年９月笠置の後醍醐天皇に呼応し、下赤坂城に篭って挙兵したために、鎌倉幕府の２万（太平記には２０万騎）の大軍が攻め寄せたという。下赤坂城はほどなく落城し天皇は隠岐に配流された。翌年には、下赤坂城を奪還し、上赤坂城に平野将監を配して防衛に当たらせたが、水を絶たれたため、元弘 3 年 (1333) に落城した。　楠木正成率いる本隊は、上赤坂城から４キロ離れた千早城に篭もり、長期戦の末に鎌倉幕府は滅亡した。　上赤坂城は平成 17 年から 19 年度にかけて主郭の発掘調査を行い、柱穴列が確認され構造物があったと確定できる。

〈地図は、「図説中世城郭辞典(新人物往来社)」より引用〉

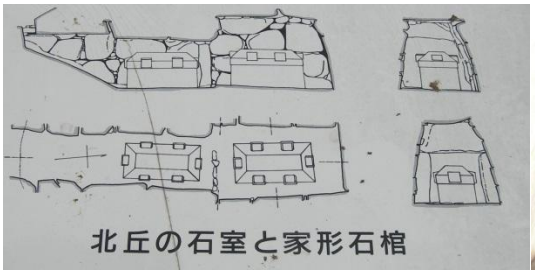
※建水分神社（たけみくまりじんじゃ）・・・崇神天皇 5 年（紀元前 92 年）、諸国が飢饉となったとき、金剛葛城の山麓に水分神が祀られたことを起源とする。延喜式神名帳に「河内国石川郡 建水分神社」と記載されている。元の鎮座地は現在地より北約 100m にあったが、南北朝時代に兵火にかかり荒廃した。このため建武元（1334）年、後醍醐天皇の勅命を受けた楠木正成が、現在地に本殿、拝殿、鐘楼などを再建し遷座した。　境内には、楠木正成を祀る摂社・南木神社（なぎじんじゃ）がある。千早赤阪村では１０月の第三土・日に建水分神社の盛大な秋祭りを行う。

金山古墳

金山古墳は大小二つの円丘を合わせた双円墳という全国的にも珍しい形で、6 世紀末から 7 世紀初頭、ちょうど前方後円墳がつくられなくなるころの古墳である。
北丘は 2 段に、南丘は 3 段に築かれ、墳丘の周囲には掘がめぐらされている。各段のあいだと墳頂部の平坦面には石が敷かれていた。北丘には長さ約 10m の横穴式石室があり、中には凝灰岩をくりぬいてつくった家形石棺が 2 個置かれている。石室や石棺の中はすでに盗掘されており、わずかにガラス玉、耳輪、馬具、鉄刀、土器の破片が出土しただけである。石室前にはくびれ部西側へとつづく墓道（通路）があり、石室入口をふさいだあと、この墓道は埋められていた。この部分だけ埋葬直後の姿に復元しています。
南丘にも石室へとつづく墓道がみつかり、横穴式石室があることは分ったが、未調査である。
（墳丘の実測図、測定値、北丘の石室と家形石棺の図は河南町のＨＰより引用、文は同ＨＰを参考にした）



1. 墳丘長：85.8m
2. 南丘直径：55.4m
3. 北丘直径：38.6m
4. 南丘高：9.4m
5. 北丘高：6.8m



■弘川寺　真言宗醍醐派の準別格本山である。山号は竜池山。本尊は薬師如来。
665 年、役小角によって創建されたと伝えられ、676 年にはこの寺で祈雨法が修せられて天武天皇から山寺号が与えられたという。
平安時代の弘仁 3 年（812 年）空海によって中興され、文治 4（1188）年には空寂が後鳥羽天皇の病気平癒を祈願している。文治６（1190）年、歌人と知られる西行法師がこの寺で陰暦 2 月 16 日、釈尊涅槃の日に７３歳で入寂したといわれている。　寛正 4（1463）年兵火により焼失したが、江戸時代に入り寛延年間（1747 年～1750 年）歌僧・似雲（じうん・安芸宮島の浄土真宗光明院で出家）がこの寺を訪れ、西行堂を建立している。樹齢 350 年余の海棠（バラ科の一種：府指定の天然記念物）がある。境内には　西行坐像をまつる西行堂 及び西行記念館があり、西行直筆といわれる掛け軸をはじめ、西行法師にまつわる数多くの資料が展示されている。

【西行】
俗名は佐藤 義清（さとう のりきよ）。藤原氏の出自で、藤原秀郷の 9 世孫。佐藤氏は義清の曽祖父・公清の代より称し、家系は代々衛府に仕え、また紀伊国田仲荘の預所に補任されて裕福であった。保延 3（1137）年に鳥羽院の北面武士としても奉仕していた。和歌と故実に通じた人物として知られていたが、保延 6（1140）年 23 歳で出家して円位を名のり、後に西行とも称した。出家後は心のおもむくまま諸所に草庵をいとなみ、しばしば諸国を巡る漂泊の旅に出て、多くの和歌を残した。

〈弘川寺の本堂〉

〈歌碑・「願わくは花の下にて春死なむ　そのきさらぎの望月のころ」〉・・死去する十数年前の歌

近つ飛鳥博物館

古墳の宝庫「近つ飛鳥」の中核的文化施設として、平成６（1994）年に開館した。古墳時代から飛鳥時代にかけての文化遺産を中心に、「日本古代国家の形成過程と国際交流をさぐる」をメインテーマとしている。館内は、「近つ飛鳥と国際交流」「古代国家の源流」「現代科学と考古学」の 3 つの基本テーマで構成され、さまざまなメディアを通じて、来館者にとってわかりやすいものとなるように工夫されている。歴史ミニチュア模型としては日本最大の仁徳陵古墳の復元模型、古墳時代に重量物を運搬した長さ８．８ｍ、重さ３．２ｔの「修羅」や金山古墳の家形石棺の実物大模型などが展示されている。

平成 25 年度秋季特別展「考古学からみた推古朝」を開催

・古墳時代から飛鳥時代へと移り変わっていく変革期の考古資料を約 500 点展示。
・推古天皇の時代、前方後円墳の造営を止め、大型の方墳・円墳を営むようになる。その背後の政治的・社会的・思想的な変化を畿内と東国の資料で比較する。
・考古資料から初期寺院の展開を探求し、仏教普及の歴史的背景について考える。
・推古朝における土地開発史上の画期とその意義について考える。

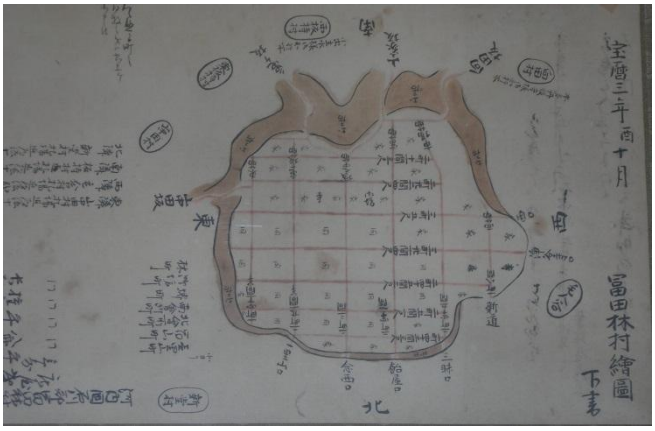
〈以上は同館から報道発表された資料を要約〉

※近つ飛鳥・・・・大陸との窓口が難波の港に設けられた頃、難波宮からみて「近い飛鳥」という事で、現在の大阪府南河内郡辺り一帯をさした。それに対し、奈良県高市郡の明日香村を「遠つ飛鳥」というが、通常はただ「飛鳥」と呼ばれる。

※近つ飛鳥風土記の丘・・・・「風土記の丘」では１０２基の古墳のうち４０基の古墳を整備、公開し、園路を巡りながら見学できるようになっている。博物館は、この「風土記の丘」と一体的な施設になっている。

■富田林寺内町

室町時代前期の応永年間（１３９４～１４１２年)、後に寺内町の中心となる興正寺別院の「基」とも言うべき念仏道場が毛人谷（えびたに）村に創建された。戦国時代・永禄３（１５６０）年、浄土真宗本願寺派の第８世法主・蓮如（れんにょ）上人の孫にあたる、証秀上人（京都興正寺・第１４世門跡）が、当時畿内を支配していた三好山城守(三好長慶と思われる)の下で高屋城主だった安見美作守直正から、境内地として「富田の芝」（もしくは「富田が芝」）と呼ばれる荒芝地を銭百貫文で購入した。　　翌年には、近隣４ヶ村から庄屋株の者２名ずつ、計８名（「富田林８人衆」）の協力を得て芝地を開発、御坊の移転建立と共に町割りや屋敷・田畑などの整備が行われた。これが、現在も残る富田林寺内町と興正寺別院の始まりと伝わる。寺内町は、丘陵の上部をけずり、周囲に土居を巡らし、東西約 400 メートル、南北約 320 メートルの楕円形に計画された。



本寺の興正寺は当初、京都・山科に存していたが天文元（１５３２）年に焼失、蓮如の子・蓮秀は、天満にあった別院を本寺とする。さらにその蓮秀の子が証秀で、本願寺一族、つまりである証秀が建立したことから、寺格（寺の格式）が高い富田林の興正寺は別院と称された。　　寺内町は、六筋七町に区画された。その姿は、宝暦 3 年（1753）の古絵図からうかがうことができる。その後、町は七筋八町に拡大した。そのことは、安永 7 年（1778）の古絵図から確かめることができる。南北方向の街路が「筋」、東西方向の街路が「町」と呼ばれた。

寺内町は、四ヶ所に出入り口が配置され、塞都市としての性格を備えていた。また、「筋」と「町」の交わる街路は「あてまげ」と呼ばれる食い違い形になっており、通りの見通しを妨げている。これも防御的意味合いからつくられた。寺内町が建設されて約 40 年後の文禄 5 年（1596）の富田林は、205 軒の家数を数える町であった。

江戸時代に入ると、富田林は、興正寺別院を中心とした寺内町としての性格は急速に失われ、周辺農村部を後背地とした在郷町として存続した。寛永 21 年（1644）には、285 軒の家数を数え、商人 79 人、職人 33 人が住む町であった。後背地である南河内の農村部では、米はもとより、綿・菜種などの栽培が盛んで、富田林はこれら栽培作物の取引の中心地として賑わいをみせた。また、町には造り酒屋をはじめ、木綿の商取引で財をなした家が多く、豪壮な白壁造りの町家が軒を連ねる町並みが形づくられた。　　旧寺内町には、国の重要文化財に指定された旧杉山家住宅をはじめ、17～18 世紀に建てられた町家が数多く残されている。古い町家は、低い厨子二階の母屋が特徴で、思い思いに意匠を凝らした虫籠窓が町並みにアクセントを与えている。母屋と土蔵・付属屋などは長く伸びた塀によって結ばれ、いかにも在郷町の豊かさが感じられる町並み景観である。また、江戸時代の伝統的な建築様式を受け継ぐ明治期の町家も多い。

※「富田林・寺内町をまもりそだてる会」・・・歴史的町並み保存運動に取り組む地元住民の会。「地元に残る優れた歴史的町並み・文化遺産を後世まで保存・継承したい。」との熱い思いから平成６年 7 月に発足した。　歴史的町並み保存に向けて、富田林市文化財課の支援を得ながら、町の清掃・防火防災訓練、会報発行、記念イベント企画、ボランティアガイド、研修会などさまざまな活動に地道に取組んでいる。

※　「日本の道百選」・城之門筋・・・興正寺別院の表門は、伏見城の城門だったものを、京都の興正寺への移築を経て再移築したと伝えられている。また、門に面した城之門筋は、昭和６１年に旧建設省の「日本の道百選」に選定されており、富田林寺内町の代表的風景である。　百選は他に・・哲学の道（京都府京都市)、御堂筋（大阪府大阪市)、大山道路（鳥取県大山町)、吉備路自転車道（岡山県岡山市ほか)、平和大通り（広島県広島市)、うだつの町並み（徳島県美馬市）など、全国に１０４本がある。

◎以下は『ホームページ「富田林・寺内町の探訪」』などを参考にさせていただきました。

奥谷家住宅

建築年代　1818－29 年（文化元年～文政 12 年 ）大阪府河内長野市岩瀬から明和９（1772）年にこの地に移住した。

屋号・岩瀬屋　　生業・材木問屋

〈屋根上の忍び返しと道路際の犬矢来〉〈道路際の駒よせと格子窓〉〈軒下のもちおくり〉

〈屋根の上には煙出し〉　　〈当家の東には防火用水に架けた石橋が有る　今は暗渠〉
〈岩瀬屋の永久の繁栄を願って　「がん恵いはし」　とある〉

〈重厚な本瓦葺きの屋根〉　　〈軒下の防火用水〉

（東）奥谷家住宅

建築年代　1826 年（文政 9 年）

屋号・岩瀬屋　生業・油屋

〈煙出しの屋根は地元のせんべいの図案になった〉〈出格子窓〉〈虫籠窓と煙出し〉

越井家住宅

家は先祖が平尾村　（ 大阪府南河内郡美原町平尾）から当地に移住したといい、代々「平尾屋庄兵衛」を名乗った。　材木商を営み、安政年間（１８５４－６０年）には庄屋を務めた家柄である。母屋は明治末期の建築で、当家の材木置場跡に建てられたものである。　越井家は地元の素封家で材木業・越井林業をはじめ広く事業を営み、昭和初期に大鉄電車（大阪鉄道＝近畿日本鉄道南大阪線）社長を務めた。昭和４年に古市－久米寺間延長や２０ｍ級大型車増備など、積極的に大鉄電車の経営を推進した。

〈広大な敷地は寺内町の北東の大部分を占める〉〈米蔵は墨を塗り込めた黒漆喰〉

興正寺別院

由来：応永年間（１３９４－１４１２年）に毛人谷（えびたに）御坊に草創。 永禄３年（１５６０年）に京都・興正寺第１４世証秀上人が現在地に移建。 建物の特徴：城之門筋に表門を開き、鐘楼・鼓楼を構え、本堂・客殿・庫裏などを配する。表門は桃山調の高いもので、伏見城の門遺構であり、二度移築されている。一度目は京都の興正寺に北門として移築されて、二度目は安政 4（1857）年に興正寺別院山門として再移築された。

〈表門〉

〈鐘楼〉

旧杉山家住宅・・・・国の重要文化財。富田林寺内町の創設にかかわった旧家の一つであり、江戸時代は造り酒屋として栄えた。現存する家屋は江戸時代中期の大規模商家の遺構え、寺内町で最も古い。最盛期には使用人だけで 70 人を数えたと言われている。　江戸時代の屋敷図によると、屋敷地は町割の一画を占める広大なもので、その中に主屋をはじめ酒蔵、釜屋、土蔵など十数棟が軒を接して建てられており、その繁栄をしのばせる。 建物内部はよく保存されて近世の状態をよくとどめている。大床の間に描かれた老松や襖絵は狩野派の絵師によるもので、往時の繁栄がしのばれる。明治時代の明星派女流歌人・石上露子（本名　杉山タカ）の生家でもある。建築年代　1644（寛永元）年　　屋号・わたや　　生業・酒造業

※石上露子・・明治 15 年に生まれ、幼時から古典や漢籍、琴などに親しみ、二十歳頃から『明星』などに短歌，詩、小説などを発表した。古典の教養をもとに、華麗さの中に深い憂いを漂わせた作風で評価された。明治期の中央歌壇で注目を集め、明治 36 年に『新詩社』（明星発行の結社）の社友となり、与謝野晶子、山川登美子、茅野雅子、玉野花子とともに「新詩社の五才媛」と称された。　二人の息子をもうけたが、長男が病死、二男は自殺し、昭和３４年（１９５９年）に７８歳で死去した。　故・山崎豊子の作品「花紋」のモデルとされる。

（南）葛原家住宅

建築年代　19 世紀中期　　屋号・十津川屋　生業・酒造業・味醂醸造業

〈三階蔵は年貢米を入れる蔵であった〉　　〈出格子窓、虫籠窓〉

葛原家住宅

建築年代　19 世紀初期　葛原家は奈良県吉野郡十津川村の元郷士といい、天明元（1781）年頃に当地で酒屋を始めたと伝える。現在の母屋は 19 世紀の初頭の再建と考えられ、宝永７年の絵図では東方に会所があった。会所町の名称の由来と言える。

屋号・十津川屋　　生業・酒造業

佐藤家住宅

建築年代　1820 年（文政 3 年）　屋号・佐渡藤　　生業・紅梅味醂醸造

〈厨子二階　煙出し　虫籠窓は中央に文様が見える〉

〈明治時代に建てられた新宅は、軒が高く虫籠窓も大きい〉

〈石の駒つなぎ　駒つなぎには牛や馬をつないだ〉

〈木口家の板暖簾〉

〈仲村家は天明２～３（1782～83）年の建築
吉田松陰の逗留が記録されている〉

備陽史探訪の会

【事務局】
〒720-0824　広島県福山市多治米町5-19-8
TEL　084-953-6157
E-mail　info@bingo-history.net

公式サイト
http://bingo-history.net